

2016年10月30日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉師

聖書：マルコ3：7－19

タイトル：「 純と不純 」

序文；

毎月第二主日にマルコの箇所から御言葉を取り次がせていただいておりますが、礼拝メッセージよりも学びのテキストの方が先に進んでおりますので、第二主日だけではなく、第三、そして第五主日も続けてマルコから御言葉を取り次がせていただきたいと思います。

ある程度連続して「マルコの福音書」に目を向けていくことで、また新たなことを発見したり、教えられたりすることがあると思いますので、神様に期待していきたいと思います。宜しくお願い致します。

<メッセージ>

マルコの福音書3：7－19。この箇所は2つに分けることが出来る。

1：人々の癒しと悪霊を追い出し。

2：イエスの12弟子（使徒）任命。

この2つの出来事の中に共通する「純粹（な信仰）」の部分と、また「不純（な信仰）」の部分というものをそれぞれ見ていきたい。

1：人々の癒しと悪霊を追い出し

7－12節は、前節の（安息日）出来事を受けて始まっている。ただし12節まで全部が同じ安息日の中で起こっている出来事かは解らない。少なくとも文脈から最初の7節は、同じ安息日の中で起こっていると考えられる。

さて、この7節だけでも非常に大きな出来事と言える。なぜなら、多くの人々がイエスについて行き、湖のほうまで行ったというのは、ハラカーというユダヤ教の厳格な安息日規定によれば、当然、定められていた安息日に歩いて良い距離を越えて、彼らはイエスについて行ったと考えられるからである。

さらに、6節の出来事は、イエスとユダヤ教の指導者たちとの間の決定的な「分断・分裂」となった出来事であった。

それは、これまではパリサイ人達などのユダヤ教の指導者の人々は、「イエスとはいったい何者なのか？」と、疑いの目で見ていることから、「イエスをどのようにして葬り去ろうかと相談を始めた（6節）」と、殺意に変わったことから分かる。

つまり、ユダヤ教の指導者たちとイエスの間に、この時からはっきりとした分裂ができたのである。

この時、この大きな出来事を目の当たりにした人々が、ユダヤ教の指導者たちに従わないで、イエスについて行き湖まで行った。というのは、ユダヤ人にとっては実に大きな決断と変化であったと言える。

ここに、彼ら（群衆）のイエスに対する「純粹（な信仰）」というものが見える。これ本当に素晴らしいことである。

さて、こうした人々（群衆）の数は次第に多くなった。

## 8 節「・・・」

<場所を地図で確認>

今やこれほどの多人数となったため、イエスは「ご自分のところに「押し寄せてこないように」と、弟子たちに小舟を用意しておくように言いつけた(9 節)」。また 10 節には実際に「押しかけきた」とある。湖を背にすることで、人々をご自分の前方だけに集めることができたのだろう。より確実に御言葉を伝えることが出来たと考えられる。また、癒しや悪霊追い出しなどの必要な作業が一番スムーズにできたとも考えられる。なぜなら船に乗っての作業となれば、一番近い浅瀬の人々から、極限られた人数に対して、イエスは癒しと悪霊追い出しの御業をすることが出来たからである。非常に理にかなった知恵のあるイエスの伝道方法であったと言える。伝道する「場所」や「方法」を考えることは良いことである。

## 11-12 節「・・・」

汚れた霊とは、マルコ 1:23 でも出てきたが、この汚れた霊どもは、イエスのことを「神の聖者です。」と言っていた。また 3:11 では「あなたこそ神の子です」と叫んでいる。イエスはそれらのことに対して、いつも「ご自分のことを知らせないように、厳しく戒め」ている。この汚れた霊が言っている言葉自体は、ある意味間違いは無いのだが、しかしイエスはそれを決してお赦しになっていない！

なぜか？そこには、汚れた霊の動機と関係しているように思う。

この汚れた霊は、決して純粋な動機からイエスについて告白しているのではない。自分自身にとって都合の良いように、「不純」な動機をもって彼らは行動しているのである。

マルコ 3:22 には「悪霊」とある、これはこれまでの汚れた霊の追い出しなどの一連の出来事を受けて言われていることである。また 23 では、イエスが「サタンがどうしてサタンを追い出せましょう」と、これがサタンにまで発展する。すなわち、汚れた霊とは、悪霊、でありまたサタンと、本質的には同じなのである。サタンとは悪魔とも言えるが、ヨハネはそのことを見事に記している。

ヨハ 8:44 「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」まさに悪魔の性質、本質を見事に語っている。

もう一つ I ヨハ 3:8 「罪を犯している者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現れたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。」

つまり悪魔の本質とは「偽り」である。それゆえイエスは御自身のことを彼らに何一つ語られる必要が全く必要ない！のである。むしろ「悪魔のしわざを打ちこわすため」に来ているのである。

悪霊たちは常に汚れた「不純」な動機・信仰で行動を起こす。それは一見立派そうに見えることもあるだろう、あるいは聞こえることもあるだろう、しかしそこには、「自分の欲望を成し遂げたい」という「不純(な信仰・動機)」が隠れているのである。

そういった意味では、ハラカーという安息日規定を破ってまでも、イエスの御もとに押しかけてきた人々（群衆）は、イエスに対する「純粹(な信仰)」を持っていたと言える。

## 2：イエスの12弟子（使徒）任命

さて、この群衆の中には、さらにイエスに近付きたいという人々もいた。それが「弟子」と言える。この時すでにイエスの周りにはある程度の「弟子」たちが居たことは、これまでを振り返れば分かる。また実際に聖書には名前が記されていない人々も多くいたであろう。事実、12弟子を選んだ後にイエスは新たに70人の弟子たちを「村々に遣わす」ということが記されている。ゆえに、この時ある程度の弟子たちが居たことが分かる。

この多くの弟子たちの中からイエスは12弟子を選んだ。

共観福音書のルカ6：12－13には、この時のことが記されている。「このころイエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。夜明けになって弟子たちを呼び寄せ・・・」と。

イエスは「夜通し祈られた」のだが、イエスは神の子だから何もそんなに祈らなくとも12弟子を選ぶには「はい、あなたとあなたとあなた・・・」と、選べなくもなかつただろう。しかし、そうはなさらなかった。あるいは、「とりあえず選んでみて、ダメだったら途中で交代しよう！」ということだって、出来たであろう。そのこともイエスはなさらなかった。この「夜通しの祈り」とは、このとき選ぶ12弟子が、後にイエスの宣教の御業と十字架の贖いとそして復活の出来事の生き証人となり、たとえ迫害の中であってもイエスに代わって、人々にこの「福音」を宣べ伝え、人々を教える者にならなければならない者達なのである！云うなれば、イエスの代わりをする者である。その大きな役目を担うものとして、いったい誰が父なる神の御心の内に選ばれている者なのか。そのことを本当に知りたい！そして間違いなくその者を選ぶ！という、確信と確認のために、イエスは夜通しの祈りをささげたのだろう。途中で逃げ出す者では主にある奉仕を全うできないのである。

さて、話は、教会の選挙のことになるが、MJCCも11月から来年の3月頃まで教会の大切な選挙がある。まさにイエスが12弟子を選んだごとく、教会もリーダー達を選ぶのである。その時にこのイエスの「夜通しの祈り」となるほど、私たちは実に真剣に祈らなければならないのではないか。なぜならそれが後に教会を大きく左右していくことになるからである。私達はそのことを自覚しなければならない。ですから、どうぞ祈っていただきたい。また、グラント師もMichaelLee師も新たな歩み始める。MJCC・カンタベリー教会には今まさに、夜通しの祈りと言えるほどの本当に祈りが必要である。

話は聖書本文に戻る。14－15「・・・」

共観福音書のマタイとルカでは、12弟子のことを「使徒」と記している。「使徒」の直訳の意味は、「遣わされた者・使者」である。マルコの箇所には、この「使徒」という言葉は記されていない。それだけでなく、実際は「弟子」という言葉も記されていない。最有力写本には、新改訳の脚注にもあるが、「12の人(彼ら)」としてしか載っていないのである。そ

れで、新改訳は前節までの意味を引き継ぎ「12弟子」と記したのであろう。翻訳に忠実なのである。また同じ脚注に異本「・・・」とある。つまり他の写本にはこのマルコの箇所には「使徒」と記されていることが分かる。新共同訳ではその別の写本を引用し「使徒と任命して」記している。

実際にマルコの福音書の原本にその言葉があったかなかったかというのは分からないが、少なくともマタイとルカにはあった。そしてそこには明確に「弟子」ということと「使徒」ということが区別されている。つまりマルコ3：7－19は、はじめに「大勢の人々(群衆)」が出てきて、その後9節で「弟子」という言葉が出てくる。またさらにその後14節で「使徒」の任命ある。それはあたかも、あなたの信仰はどの立場にいますか？「群衆」ですか、「弟子」ですかそれとも「使徒」ですか？と聞かれているかのようなのである。

イエスはさらにこのあとの4章で「種まき」の例えを話している。御言葉がまかれると鳥が取っていくのか、いばらが塞ぐのか、・・・良い地にまかれ30, 60, 100倍の実を結ぶ者となるのか、あなたはどうですか？と、私たちに教えてくださっている。

「弟子」という言葉は、ギリシャ語で「師匠に「学ぶ者）」という意味である。実際に使者となり、遣わされるにはまだ早い者と言える。

イエスは、弟子たちとのこれまでの一緒にの生活の中で、弟子たちの行動を見、また個人的に接する中で、彼ら一人一人の特徴というものをしっかり見ていたであろう。その中で、あの「夜通しの祈り」があり、選ばれたのである。

14－15節には使徒たちの役目とは、二つあることが記されている。

①イエスの「身近に置く」ということ。

これほど栄誉なことはない。そしてこれほど確実で、安心で、安全で、祝福に満ちたものはない。けれどもただ置かれるだけではなく、それは、いつでもイエスの御声を聞き、それに従うことができる者ということである。そのために身近に置かれるのである。

主の身近に居るためには、自分の持っているモノすべてを主の前に捨てなければならない。またそれは自分の命さえも捧げなさい。ということである。

マタ 10:37 「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。

また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」

マルコ8：34 「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい」

ペテロは後にマル 10:28 「ペテロがイエスにこう言い始めた。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。」

と言っている。これは簡単なようで、実は最も難しいことかもしれない。イエスが選んだ12使徒というのは、決して有力者ではない。また才能や能力がずば抜けて長けていたわけでもない。イエスが彼らに求めたことは、「自分を捨てて従うこと」ということであり、そのためには「自分の命」さえも神に委ね、あきらめなさい。ということであった。自分を捨てる者、それが使徒であり、主の身近に居る者ということである。

②「遣わすため」である。

イエスによって「神の国が到来」したという、この喜びの訪れの「福音」を伝える事が彼ら

の役目である。そしてそのためには悪霊をも追い出す権威が与えられているのである。

16-17では、使徒たちの名前が具体的に記されている。

イエスが選んだ12使徒とは、実にユニークな集団である。例えばマタイ(取税人レビ)と熱心党员シモンとは、その価値観が真逆の者達である。マタイはローマの手先として働き、シモンは断固としてローマ帝国に反対している。またペテロは熱血漢があり、お調子者でもあるが、その兄弟アンデレは、反対に控え目であった。ピリポは計算高く、トマスは疑い深いものである。またヨハネとヤコブは雷の子とよばれるほど、激情型だった……。しかし使徒たちは、イエスを中心としてまとまったのである。(一人一人はバラバラだが…)

そんな中、イスカリオテのユダも選ばれている。このユダについては、諸説あるのだが、どうやら彼だけは他の使徒たちと違い、ケリヨテ(一般的な村か特定の地名)の人(イシュケリヨテ(イスカリオテ)のユダ)であつと言われていて、つまり彼だけが南ユダ地方の出身だったのである。そうした背景もあり、彼だけはどこか使徒たちと違った思いがあつたであろう。おそらくここに、このユダの「不純な動機・信仰」というものがあつたと考えられる。つまり、ほかの使徒たちはまさに「純粋」な信仰から「主に従いたい!」とすべてを捨ててイエスに従つたのだが、このユダだけは、「本当にこの方がキリストなのだろうか?もし本当ならすべてを捨ててまでもついて行き、そのことは確かめたい!」と、どこか純粋ではない、不純な思いがあつたのではないだろうか。あるいは純粋な面も一部持っているが不純な面がおおいにある。と言つたところだろうか。ユダの行動には、この後も不純な動機が現れている。例えば金銭に欲があつたことである。彼のそうした不純な思いが献身生活の中に現れていたのである。

しかしそれでもイエスは、ユダを選んだ。なぜか?ユダはイエスを誰よりもそばで疑つて見た者と言えるが、彼はイエスを裏切つた後に、最後には、「私は罪のない人の命を売つた」と、イエスには何の罪も見当たらなかつた!ということを経験者たちに告白しているのである。これほど見事にイエスの潔白さを言えたのは、もしかするとユダ以外にはいなかったであろう。イエスはこのユダに対して、最後の晩餐の席までもユダが悔い改めるように洗足をし、聖餐式のパンと葡萄酒をも与えたのである。イエスは決して見放さないお方である。

ユダには、不純な動機があつたが、献身するほど熱心であつたということは、一つの純粋と言える。イエスは、おそらくそのことを評価されたのかも知れない。私たちにとっては、使徒に選ばれるほどであっても、簡単にサタンの誘惑に負けるのである。ということを経験者たちに学ばせていただきたい。

私たちは、イエスが使徒たちに託した宣教の使命を、今日、すべてのクリスチャンが「使徒と預言者の土台」に立つて歩んでいるのである。聖書はそう教えている。この大きなすばらしい働きに、その価値とその恵みと栄誉を自分のものとして味わい知る者とならせていただきたいと思う。

最後に使徒26:16-18、1ペテロ2:9を読んで終わりたい。